

「幡隨意上人」の信仰と救済

平野 寿則

幡隨意上人(天文十一―元和一)は、近世初頭の浄土宗の学僧である。慶長十年、家康の命を受け九州に下向し、有馬周辺においてキリシタン教徒の改宗に尽力したことで知られている。その信仰と救済の諸相については、宝永一年、江州松江称名寺の心阿撰『浄土鎮流祖伝』所収「武江幡隨意院幡隨意上人伝」、享保十一年、増上寺第三十八世の白隨意編「当山開祖智譽幡隨意上人伝」、宝暦五年、洛北五劫院の喚譽著『幡隨意上人諸国行化伝』などに詳しい。ここでは、幡隨意の事蹟を一代記にまとめたこれらの「伝記」を取り上げ、その信仰と救済の「意味」について考えてみたい。しかし、それは幡隨意をめぐる説話としての意味ではなく、説話における意味としての「幡隨意」を問うということである。すなわち、説話のプロセスを明らかにしたり、幡隨意の実像を確定して、信仰と救済の意味を同定するのではなく、むしろ、意味の同定それ自体がはらむ過剰な可能性(意味の変容)の中に「幡隨意」の信仰と救済を捉えてみなければならないのである。

周知の通り、有馬領は晴信以来、日本イエズス会の中心地の観を呈しており、晴信が旧領恢復をめぐつて岡本大八の奸策に陥り失脚した後も、子直純に遺領の有馬日野江城地四万石が下賜される。しかし時を同じく、慶長十七年三月二十一日に、幕府は「南蛮記利志旦之法、天下可停止之旨」を発し、直純及び長崎奉行長谷川左兵衛に命じて切支丹教徒を禁圧せしめ、幡隨意には、仏法

をもってこれを誨諭・改宗せしめようと企てたのである。

幡隨意をして企図された仏法誨諭と邪宗教化については、その「伝記」に詳しく、まず伊勢神宮に参籠して「対治邪宗神威」を祈ったとされる。すなわち、七日満暁に太神宮の夢告があつて、阿弥陀像一体を感得すると共に、仏法勝利が約束されるのである。幡隨意の伊勢参籠については、近世の排仏論者として著名な林羅山の日記(『勢州一事』『羅山先生別集』)にも、「子丑之年、浄土萬隨意者、建一宇于外宮内宮際」とあり、伊勢に参詣した幡隨意が外宮と内宮との中ほどに一字を建て居止していたことが知れる。また同日記には、幡隨意と老翁の対話が取り上げられ、幡隨意が「神雖嫌僧、而我以念仏他力、救神苦」と述べたのに対して、「非禮不可享、此所非爾之所居也」と、老翁はその言行を拒否したとみえる。この「老翁」については、「人皆不識此翁、因奇之、其後屢見恠」とあるように、あんに伊勢太神宮を示すものと思われるが、伊勢参籠といった幡隨意の宗教的な行為を見聞した羅山は、その立場からも、これを否定すべきものとして記載したのであろう。こうした伊勢における幡隨意の動向について「伝記」には、夢告の後日に一老翁が現れ幡隨意に謁して、阿弥陀尊像を寄附したと述べられる。そして、「老翁」は「神明之化現」であり、感得の弥陀像は「邪宗退治證拠弥陀」として描かれるのである。「伝記」によれば、邪宗退治證拠弥陀とは「皇太神一体分身」であり、すなわち、「伊勢弥陀同体」説を述べたものであるが、それは、「伊勢二天照」に象徴される神道的な諸概念(神国思想)が邪宗排除の根拠とされると共に、阿弥陀の衆生救済という機能によって、民衆の宗教的な願望を捉え返していくものと理解することができよう。「伊勢弥陀同体」説に想定される神道の諸概念

については、具体的にその関連を検討してみなければならぬが、ここでは一旦留保して、とくに邪宗排除の根拠としての阿弥陀仏すなわち幡隨意の念仏信仰と救済について、若干の検討を試みることにしたい。

幡隨意上人は、初め相模国玉縄二伝寺の範誓義順の許で剃髮し、ついで鎌倉光明寺の奉養聖伝に師事し内外の典籍を学んだとされる。その後、川越蓮聲寺の感誓存貞に学び、不残・存応・及把と共に叢林四哲の一人に数えられている。それではまず、天正六年下総国関宿の事蹟を取り上げてみよう。ここでは、密宗の僧「英園相聞黎」と「抑止摂取」をめぐって法論がなされている。英園の「二経之相違如何」とは、『無量寿経』第十八願文の「唯除五逆誹謗正法」と『観無量寿経』下品下生の「念仏衆生摂取不捨」の間にみられる悪人往生についての矛盾を指摘したものであるが、これに対して幡隨意は、いわゆる「抑止摂取」の論理によって論破している。すなわち、『無量寿経』で説かれる「抑止」とは、「未造者」に対する誡め＝方便であり、『観無量寿経』下品下生では、すでに罪を造った「已造者」も、弥陀の慈悲をもつて救済されると説かれるのであるとして、両者の矛盾を会通するのである。この議論の典拠は、善導の『観経散善義』巻四に説かれるところであるが、ここで確認しておきたいのは、幡隨意の念仏信仰とその救済が、単にそうした教義經典に基づくというだけではなく、むしろ、積極的に「五逆誹法」に向けられ、念仏をもつて「衆生摂取不捨」したということである。この点について、次の竜女化益譚を例にみてみたい。

上州館林における竜女化益は、その「伝記」の主要なモチーフであるが、いずれの場合も、三熱苦からの救済を願う竜女に対し

て、幡隨意は宗脈・布薩戒を授与し、「王譽妙竜」と戒名を授けて浄土往生させたという説話である。だが注意深くみると、『幡隨意上人伝』及び『諸国行化伝』では、五障の故に悟り得ないとしていた女性が、法華経を会得して成仏したという『法華経』提婆達多品の後半部の主題を典拠に竜女を化益するのであるが、それに対して『鎮流祖伝』は、前段でみた「抑止摂取」の法論の文脈から理解すれば、むしろ「五逆誹法」を念仏をもつて済度するという問題から「竜女」の救済が捉えられているように思われる。つまり、『鎮流祖伝』においては、竜女化益譚は女人往生とその根拠としての血脈十念といった問題であるより、むしろ「五逆誹法」という現実の根源的な問題において語られていると考えられる。すなわち、幡隨意の念仏信仰は、「抑止摂取」という理論的な問題であるより、むしろ実践的なものであったのである。それは「唯除五逆誹謗正法」「念仏衆生摂取不捨」といった議論を突き抜けたところに存する「救済されねばならない」現実である。同様にキリシタン信仰も、幡隨意にとって、邪宗排除という問題ではなく、「五逆誹法」という現実を救済するために実践的に向き合うことであった。邪法に正法をもつてすることが邪宗教化であるなら、幡隨意は「五逆誹法」の側からこれを捉えようとした。すると正法は、そうした現実と対立するものではなく、むしろ「五逆誹法」が強いものに他ならない。だからこそ「救済」されねばならないのである。こうした幡隨意の信仰と救済は、しかし、幕府のキリシタン禁教政策においては、相矛盾するものであったと言わねばならない。